

「蜜蜂と遠雷」、そして「狸（たぬき）とうどん」

「世界に国際ピアノコンクールはあまたあるが、芳ヶ江は近年評価がめざましい。それというのも、ここで優勝したものはその後著名コンクールで優勝するというパターンが続いたからで、新しい才能が現れるコンクールとしてとみに注目を集めている。」（注）

これは昨年、史上初めて直木賞と本屋大賞をダブル受賞し、大きな話題となった恩田陸さんの小説「蜜蜂と遠雷」の一部です。浜松国際ピアノコンクールをモデルに長期間にわたる綿密な取材をもとに書かれた長編大作ですが、「芳ヶ江」という地名を「高松」に置き換え、3年毎の開催を4年毎にすると高松のコンクールを題材にした小説だと言っても違和感はありません。

いよいよ、3月14日から第4回高松国際ピアノコンクールが開幕します。平成18年に第1回が開催され、回を重ねるごとに知名度も上がり、コンクールの内容も充実してきました。平成27年には国際音楽コンクール世界連盟に加盟し、名実ともに日本三大ピアノコンクールの一つに育ってきています。応募者数も過去最多となり、通しのパスポート券も1月中旬には早々と売り切れしました。

今回、特に私が注目したいのは、第3次審査で披露される本コンクールの委嘱曲です。その名も「un poco don poco」（うんぽこどんぽこ）。作曲者の小出稚子（のりこ）さんによるとテーマは、「屋島の太三郎狸が店主のうどん屋さん」。“ポンポコポン”という狸の腹鼓の音色やリズム、讃岐うどんを打つ時の体のリズム、そして狸を題材にした童謡や伝説などから着想を得て作曲したとのこと。ホームページでは、演奏の参考にと、実際のうどんの作り方が動画で見られるようになっています。打楽器の特徴も併せ持ったピアノ演奏と狸の腹鼓やうどん打ちは相通じるものがあるはず。讃岐うどんが大好きで屋島の太三郎狸を慕う高松の住民としては、なんとも嬉しいような、恥ずかしいような、そして誇らしいような気持ちです。この委嘱曲を第3次審査まで残った精鋭たるコンテストたちは、どんな風に料理して聞かせてくれるのでしょうか。

第4回高松国際ピアノコンクール。本当に楽しみです。

（注）「蜜蜂と遠雷」（恩田陸、幻冬舎、14ページ）